

ティーチング・ステートメント

所属 保健医療学部看護学科

名前 福良 薫

更新日 2024年2月26日

【責任】

保健医療学部看護学科で基礎看護学領域の教育を担当している。基礎看護学領域では入学から2年生前期に行われる基礎看護学実習で初めて患者を受け持つまでの科目（看護学概論、看護学基礎技術演習、看護過程演習、基礎看護学実習など）を担当している。その他、領域の教員への指導や大学院にて教育学特論や研究指導、外部講師として臨床指導者研修の講師を担当している。特に2024年度には、6名の新任教員を迎え入れることから初めて教育を担う人材の育成にも責任があると自覚している。

【理念】

卒業していく学生には看護師として、目の前にいる対象者一人一人を個別性のある生活する人間として尊重し、その場の状況、状態に即した看護実践を展開できる医療者として成長して欲しいと考えている。

看護はそもそも生活する人がより健康的に自分らしく生きていくことを支援する仕事である。したがって看護の対象となるのは人間である。そのため一人として同じ人はいないし、それぞれが自分らしい生活を営んでおり、個々人が尊厳される存在であるということを看護を学ぶものとして大前提に理解させたい。また、新任の教員にも学生には個性がありつつ国家資格という一定の水準の知識と技術を有する卒業生を排出することが目標であることを理解してもらいたい。

一方、人間が生命体として生きていくためには人体の構造や生理的メカニズムは共通しており、このメカニズムに即して治療や看護が展開される。したがって基本的な医学的知識を使って対象の症状や生活に応じて個々の患者に対する看護の方法を検討する力を学生は身につけなければならない。

私が主に担当している1～2年生は看護における初学者であるため、イメージが持てない臨床現場を想起させながら現在学んでいる知識がどのように看護に活用しうるのかをつかめるよう、基礎から応用へ段階的に学修を積み上げていく必要がある。

【方針・方法】

理念を実現させるために方針1「人間を理解する」、方針2「知識を積み上げる」、方針3「臨床を想起する」の3つの方針で教育を展開している。これら3つは、方針3に向かうために1と2を前提にしながら3に向かうという関係性がある。以下に3つの方針ごとに方法を概説する。

方針1：人間を理解する

・グループ活動やお互いの身体を使って学生同士の体験を題材にする演習を多く展開している。同じ教材を読んでどのように読み取ったのか、考えたのかをグループでディスカッションすることで

自分と他人の考え方の違いに気づかせるような働きかけをしたり、看護の援助を患者・看護師役を演じてもらい実際に体験しながら心地よかったことや不快に思ったことをお互いにディスカッションすることで個別性の理解を促している。

- ・グループ活動の大前提はお互いが人として尊重されるよう事前に準備することを課している。すなわちディスカッションでは事前に各自の意見を準備する、技術演習では安全に行うための事前学修を充分してくることで他人の尊厳を守るよう指導している。また、自分も学生の時間を無駄にしないような時間管理に努めたり学生の質問や意見に必ず答えるなどロールモデルとなるよう努めている。

方針2：知識を積み上げる

- ・いくつかの授業では前回の学習内容を小テストで確認してから始める。小テストの出題はその日の授業で基礎になる知識を確認することにより前回の知識があるとその日の講義がわかりやすくなるように設計する。

- ・授業後には必ず感想と質問を求める。次の授業では感想や質問を題材にしながら展開し積みあがっていることを強調している

- ・自分の担当以外の関連科目の進度も把握するようにし使える知識を引き出すように働きかける。

- ・授業資料は実習等の臨床で活用できる原則を掲載し、スライドは理解を促す補足として活用している。

方針3：臨床を想起する

- ・臨床の協力を得て映像を用いる、状況が想起できるようプチ動画（ロールプレイ）を作成する、事例を作成して状況設定を考えさせるなど、実習にまだ行っていない学生に対し臨床での状況を想起させるよう働きかけている。

- ・新任の教員は直前まで臨床で勤務しているため、彼らの臨床経験を語る場を作って学生に臨床のイメージを持ってもらう。

方針4：新任教員の育成

- ・自分も含め新任の教員と学生のディスカッションを通して学生たちが個々どんなことに興味関心を示し、どんな発想があるのかに関心を寄せて見る取り組みをしたい。

- ・新任の教員も自分とは年代が離れてきたので彼らの教育背景や教育観・看護観に耳を傾ける。

- ・学生への指導で新任の教員がどのような点に困難を感じているのかを聴き、一緒に解決できるような関り経験値を増やしていってもらう。その際、理解度の高い学生とのかかわりから経験させるなどの順序性を検討する。

【成果・評価】

・担当科目の授業アンケートでは学生の目標達成状況は「非常にそう思う」「そう思う」を合わせて 80~90%であり、毎回の目標達成と教員の準備に対しても 95%程度が充分と解答していることからおおむね成果を得ていると考えている。

・また、成績も・学生の記録物からも 1 年前期に知識を使えなかった学生が 2 年生の実習時期には授業資料を活用しながら事例展開ができるようになっていくことが見て取れる。

【目標】

2021 年度の目標として授業案の作成をあげたが、記録として授業案を作成したり評価することが出来なかった。新型コロナウイルス感染症を理由にはしたくないが、ここ 3 年間は感染との戦いであり、特に演習科目ではどの程度学生たちを接触させて演習を組み立てるのが最も悩ましい課題であった。そのため、授業（演習）一つ一つに対し、学生同士で体験する必要性と感染の可能性とを常にはかりにかけ毎年修正しながら授業を組み立ててきた。そのためエビデンスの残る資料作成は出来なかった。一方、この演習形態の検討には協働で授業を展開する教員たちとのディスカッションが必須であったため、どのように授業を組み立てれば最大の効果が得られるのか密に検討する機会になった為、2022 年度の目標は達成したと考えられる。

2024 年度に向けてコロナ感染の問題をさほど気にしなくなったことに加え、新任の教員を多数受け入れることから、若い教員と共に教育の方法を考える土壌を形成しつつ効果的な授業計画書の作成をめざす事が 2024 年度の目標である。